

船弁慶

観世小次郎作

前

ワキ 武藏坊弁慶

ワキヅレ（数人） 義経従者

子方 判官義経

狂言 船頭

シテ 静

後

ワキ 前に同じ

ワキヅレ 前に同じ

子方 前に同じ

シテ 平知盛

季は

摂津

地は

摂津

「今日思ひ立つ旅衣。く。帰洛をいつと定めん。

詞

「かやうに候ふ者は。西塔の傍に住居する武蔵坊弁慶にて候。さても我君判官殿は。頼朝の御代官として平家を亡ぼし給ひ。御兄弟の御中日月の如く御座候ふべきを。ゆひかひなき者の讒言により。

御中たがはれ候ふ事。かへすぐも口惜しき次第にて候。然れども我君親兄の礼を重んじ給ひ。一まづ都を開きあつて。西国の方へ御下向あり。の浦へと急ぎ候。

御身に過りなき通りを御歎き有るべき為に。今日夜をこめ淀より御船に召され。津の国尼が崎大物の浦へと急ぎ候。

「頃は文治の初めつかた。頼朝義経不会の由。すでに落居し力なく。

判官

「判官都を遠近の。道狭くならぬ其さきに。西國の方へと心ざし。

ワキ、ツレ 「まだ夜深くも雲井の月。出づるも惜しき都の名残。

ひとゝせ平家追討の。都出には引きかへて。唯十

余人すごくと。さも疎からぬ友舟の。

下歌

「上り下るや雲水の。身は定めなき習ひかな。

上歌
「世の中の。人は何とも石清水。く。清み濁るを
ば神ぞ知るらんと。高き御影を伏し拝み。行け
ば程なく旅心。潮も波も共に引く。大物の浦に着
きにけり。く。

ワキ詞

「御急ぎ候ふ程に。是はゝや大物の浦に御着きにて

候。某ぞんじの者の候ふ間。御宿の事を申し付け
うするにて候。如何に此屋のあるじの渡り候ふか。
狂言
「誰にて御入り候ふぞ。

ワキ
「いや武蔵にて候。

狂言
「さて只今は何の為の御いで候ぞ。

ワキ
「さん候我君を是まで御供申して候。御宿を申し候
へ。

狂言
「さらば奥の間へ御通り候へ。御用心の事は御心安

く思しめされ候へ。

ワキ 「如何に申し上げ候。恐れ多き申し事にて候へども。正しく静は御供と見え申して候。今の折節何とやらん似合はぬ様に御座候へば。あつぱれ是より御かへしあれかしと存じ候。

判官 「ともかくも弁慶はからひ候へ。

ワキ 「畏つて候。さらば静の御宿へ参りて申し候ふべし。

ワキ詞 「いかに此屋の内に静の渡り候ふか。君よりの御使

に武蔵が参じて候。

シテ詞 「武蔵殿とはあら思ひよらずや。何のための御使にて候ふぞ。

ワキ 「さん候只今参る事余の儀にあらず。我君の御詫には。是までの御参りかへすぐも神妙に思しめし候ふ去りながら。唯今は何とやらん似合はぬやうに御座候へば。是より都へ御帰りあれとの御事にて候。

シテ

「是は思ひもよらぬ仰せかな。 いづくまでも御供と
こそ思ひしに。 頼みても頼みなきは人の心なり。

あら何ともなや候。

ワキ

「さて御返事をば何と申し候ふべき。

シテ
「みづから御供申し。 君の御大事になり候はゞ留ま
り候ふべし。

ワキ

「あら事々や候。 たゞ御とまり有るが肝要にて候。

シテ
「よくく物を案ずるに。 是は武蔵殿の御はからひ

と思ひ候ふ程に。 わらは参り直に御返事を申し候
ふべし。

ワキ

「それはともかくもにて候。さらば御参り候へ。

「如何に申し上げ候。 静の御参りにて候。

判官

「いかに静。此度思はずも落人となり落ち下る所に。

是まではるぐ來りたる心ざし。 かへすぐも神
妙なりさりながら。 はるぐの波濤をしおぎ下ら
ん事しかるべきからず。 先此度は都にのぼり。 時節

シテ
「さては誠に我君の御詫にて候ふぞや。よしなき武

藏殿を恨み申しつる事のはづかしさよ。返すべ
も面白なうこそ候へ。

ワキ
「いやく、是は苦しからず候。唯人口を思しめすな
り。御心変はるとな思召しそと。涙を流し申しけ
り。

シテ
「いやとにかくに数ならぬ。身には恨みもなけれど

も。是は舟路の門出なるに。

地
「浪風も。静を留め給ふかと。
く。涙を流し木
綿四手の。神かけて変はらじと。契りし事も定め
なや。げにや別れより。まさりて惜しき命かな。
君に二たび。逢はんとぞ思ふ行末。

判官
「如何に弁慶。静に酒をすゝめ候へ。

ワキ
「畏つて候。げにげに是は御門出の。行末千代ぞと
菊の盃。静にこそはすゝめけれ。

シテ

「妾は君の御別れ。やる方なさにかきくれて。涙に
むせぶばかりなり。

ワキ

「いや／＼これは苦しからぬ。旅の舟路の門出の和
歌。唯一さしと勧むれば。

シテ

「其時静は立ち上り。時の調子を取りあへず。渡口
の郵船は。風静まつて出づ。

地

「波頭の謫所は。日晴れて見ゆ。

ワキ

「是に鳥帽子の候ふめされ候へ。

シテ

「立ち舞ふべくもあらぬ身の。

地

「袖打ち振るも恥かしや。

シテサシ

「伝へ聞く陶朱公は勾践を伴なひ。

地

「会稽山に籠りて。種々の智略をめぐらし。終に

呉王を亡ぼして。勾践の本意を達すとかや。

クセ

「しかるに勾践は。二度代を取り。会稽の恥を雪ぎ
しも。陶朱功を成すとかや。されば越の臣下にて。

政を身に任せ。功名富み貴く。心の如くなるべき

を。功成り名遂げて身退くは。天の道と心得て。

小船に棹さして。五湖の遠島をたのしむ。

シテ
かる例も有明の。

地 「月の都をふりすてゝ。西海の波濤におもむき。御身の科のなきよしを。歎き給はゞ頼朝も。終にはなびく青柳の。枝を連ねる御ちぎり。などかは朽ちし果つべき。

地 「唯たのめ。 (舞)

シテワカ
「唯頼め。しめぢが原のさしも草。

地 「我世の中にあらん限りは。

シテ
「かく尊詠の偽りなくは。

地 「かく尊詠の偽りなくは。やがて御代に出舟の。

歌 「船子ども。はや纜を疾くくと。く。すゝめ申せば判官も。旅の宿りを出で給へば。

シテ
「静は泣くく。

地 「烏帽子直垂ぬぎ捨てゝ。涙にむせぶ御別れ。見る

目もあはれなりけり。／＼。（中入）

(中入)

ワキ詞「静の心中察し申して候。やがて御舟を出ださうずるにて候。

ワキヅレ「いかに申し候。

ワキ「何事にて候ふぞ。

ワキヅレ「君よりの御詫には。今日は浪風あらく候ふ程に。

御逗留と仰せ出だされて候。

ワキ「何と御逗留と候ふや。

ワキヅレ「さん候。

ワキ「是は推量申すに。静に名残を御惜しみあつて。御逗留と存じ候。先御思案有つて御覽候へ。今此御身にてかやうの事は。御運も尽きたると存じ候。其上一とせ渡辺福島を出でし時は。以ての外の大風なりしに。君御舟を出だし。平家を亡ぼし給ひし事。今以て同じ事ぞかし。急ぎ御舟を出だすべし。

「げにくは理なり。いづくも敵と夕浪の。」

「立ち騒ぎつゝ舟子ども。」

「えいやくと夕汐に。つれて舟をぞ出だしける。」

「あら笑止や風が変はつて候。あの武庫山おろし弓弦羽が嶽より吹きおろす嵐に。此御舟の陸地に着くべき様もなし。皆々心中に御祈念候へ。」

「いかに武藏殿。此御舟にはあやかしが付いて候。」

「あゝ暫く。さやうの事をば船中にては申さぬ事にて候。あら不思議や海上を見れば。西国にて亡びし平家の一門。おのく浮み出でたるぞや。かかる時節を伺ひて。恨みをなすも理なり。」

「いかに弁慶。」

「御前に候。」

「今更おどろくべからず。たとひ惡靈恨みをなすとも。そもそも何事の有るべきぞ。悪逆無道の其積り。神明仏陀の冥感に背き。天命に沈みし平氏の一類。」

地「主上を始め奉り。一門の月卿雲霞の如く。波に浮びて見えたるぞや。

後ジテ

「抑是は。桓武天皇九代の後胤。平の知盛幽靈なり。

詞「あらめづらしやいかに義経。思ひもよらぬ浦浪の。

地「声をしるべに出舟の。」

シテ「知盛が沈みし其有様に。

地「又義経をも海に沈めんと。夕浪に浮べる長刀執り直し。巴浪の紋あたりを払ひ。潮を蹴立て悪風を

吹きかけ。眼もくらみ心もみだれて。前後を忘ずるばかりなり。

判官

「その時義経少しもさわがず。

地「その時義経少しもさわがず。打物抜き持ち。うつゝの人に向ふが如く。言葉をかはし戦ひ給へば。弁慶おしへだて。打物わざにて叶ふまじと。数珠さら／＼と押しもんで。東方降三世。南方軍荼利夜叉。西方大威徳。北方金剛夜叉明王。中央大聖。

不動明王の索にかけて。祈り祈られ。惡靈次第に
遠ざかれば。弁慶舟子に力を合はせ。御船を漕ぎ
のけ汀によすれば。猶怨靈は慕ひ来るを。追つぱ
らひ祈りのけ。又引く汐にゆられ流れ。また引く
汐にゆられながれて。跡白波とぞなりにける。